



固定; 10%ホルマリン液。染色; H-E。動物; 馬, サラブレッド種, 牡, 4年6カ月令(1960年5月生), 栗毛。繁養地; 東京。生産地; 北海道。用途; 競走。

臨床事項

2~3才時, 原因不明の治癒困難な右間歇性慢性肩跛行のため調教進度は著しく遅延し, 満4年6カ月令時(1964年11月)に初出走した。初出走後右肩跛行は再発し, 主として懸跛, 時には混跛を示した。駢立時, 患肢はや・前方に浮かしていた。常歩では肩関節を伸展位に近づけたま、柔軟性に乏しい運動を示し, 歩幅は前方短縮, 點頭運動を伴う。速歩および駈歩では跛行はむしろ不明瞭となる。視診ならびに触診上, 患肢肩端部すなわち上腕頭筋の鎖骨腱条を被う皮膚部分にいわゆる「岩おち」様の拇指頭面大, 表面より約2cmの陥凹が認められる。該陥凹部内の皮下には異物感ある小児拳大の限局性扁平索状の硬結部の剔出手術実施後, 患馬の跛行は良好し, 再度競走可能となり出走回数も頻繁になった。なお競走馬には本例と類似の臨床症状を呈する例がしばしば認められるが開業者(桐沢競走馬診療所)によれば, いずれも剔出手術の実施により完治しているという。

肉眼所見

鎖骨腱条部からの剔出物は正常なものより硬度を増し, 光沢に乏しい帯黄灰白色の結合組織塊で, その周辺には筋組織を少量付着し, 小指頭面大乃至示指頭面大に4分されていた。

組織学的所見

鎖骨腱条周囲の筋組織は比較的間質の細胞反応に乏しく, 筋線維の断裂, 空胞化, 破片硝子様化, 萎縮および若干の再生乃至修復像がみられた(写真1, H-E染色, 60倍)。また筋線維は梯子状に粗密な筋形質によって横縞模様を示した。筋線維にみられた大小様々な空胞内には淡染する液状物質と共に錯走する微細な膠原線維の増殖がみられ, 水腫性あるいは水腫性硬変と認められる変化を示していた(脂肪染色陰性)。鎖骨腱条部内の腱組織あるいはその筋腱移行部にも上述した変性と同質の所見がみられた(写真2, H-E染色, 365倍)。特にこの腱組織あるいは筋腱移行部に分布する小動脈あるいは細小血管壁は頻繁に水腫性粗鬆化ないし膨化が散見され, ごく希にリンパ球および形質細胞による囲管性細胞浸潤が見出された(microvascular alteration)。鎖骨腱条部には血管分布のみならず, 神経終末装置の分布も多く, 神経終末装置には変性像と思われる変化も見出された。

以上の所見から本症の形態病理発生を局所の機能との関連の場から検討すると, 鎖骨腱条部の筋—腱組織における変性は水腫性変化が基盤を為しており, 特に血管—神経分布の多い腱移行部においては上述の変化が頻繁に認められ, 同時に硬変ともいわれるべき事象も見出されていることが重要な所見であると考えられる。

組織学的診断: 鎖骨腱条部の筋腱変性。